歴史地理学　46－5（221）25～39　2004. 12

対立する記憶と場所

― 小港町・香川県汐木をめぐる歴史意識 ―

大　平　晃　久

Ⅰ．場所と記憶
Ⅱ．近代の汐木をめぐる記憶と忘却
　(1)　郷土誌の記述
　(2)　大きく相違する記憶
Ⅲ．来歴を誇る「物語」と汐木
　(1)　「物語」の創出
　(2)　著名な出来事をめぐる語り
Ⅳ．おわりに

Ⅰ．場所と記憶

汐木は香川県の西部，瀬戸内海に注ぐ高瀬川の河口近くに位置する集落である。大正年間まで港町としてある程度の繁栄をみたこの集落は，河口に発達した他の多くの港町と同様，鉄道の開通や船の大型化によって第二次世界大戦前には全く衰微してしまった。このようにまとめたなら汐木はありふれた小港町でしかないが，どのような語りがこの場所に向けられてきたかに注目する場合，興味深い事例になると思われる。なぜなら，汐木は吉津村と詫間村の２ヵ村にまたがって拡大し，現在でも香川県三豊郡三野町（旧吉津村ほか）と同郡詫間町（旧詫間村ほか）の境界上に位置しており[1]，吉津側と詫間側では自治体史などにおける汐木の記述が大きく異なっているからである。

ある場所の歴史を，実体としてばかりでなく，誰かによって解釈された表象として把握する，構築主義的かつカルチュラル・スタディーズ的な研究は，これまで地理学においてさまざまに行われてきた[2]。例えば観光の文脈の中で[3]，またよりあからさまな権力の行使と対立の中で[4]，場所の意味づけが新たに行われたり変容したりすることが論じられてきた。

こうした動向と軌を一にする動きとして注目されるのが，歴史学を中心とした記憶論の広がりである。記憶は「過去を認識しようとするあらゆる営み，そしてこの営みの結果得られた過去の認識のあり方」[5]と定義できるように，記憶に注目することは歴史意識を問うことに他ならない。すなわち，記憶という概念を用いることによって，歴史という概念が有する過去についての唯一の正しい表現という含意を避け，歴史叙述とはある視角からみた表象，すなわち「物語narrative」でしかありえないことが強調されているのである。

地理学の立場から特に注目したいのは，こうした記憶論においては場所に大きな関心が向けられていることである。フランスの歴史家ノラによる「記憶の場 lieux de mémoire」という研究概念[6]は，集合的記憶の根づいている「場」，すなわち空間，動作，イメージ，事物などに注目するものであり，そこには地理学的な空間スケールの場所も包括されている。「記憶の場」に焦点を当てることで記憶が孕むシンボル性と政治性を明らかにす

キーワード：場所，記憶，物語，港町，香川県

ることが試みられ，人々の歴史意識を問う文化＝社会史が目指されているといってよい。また，アメリカなどにおいて盛んなパブリック・メモリー論においても，集合的記憶の生成にあたって場所の果たす役割が重視されているといえる[7]。

地理学においては，広義の心象世界や景観の意味づけなどに焦点を当てた研究の中で，記憶という語こそ用いられないものの，記憶が研究対象にされてきたといえるだろう。また近年は歴史学や社会学の記憶論に影響を受け，明確に記憶を主題とした研究も数多く行われている[8]。複数の記憶，相互の対立さえ孕んだ記憶の拠り所として場所を把握することは，歴史地理学的研究にあたって，場所がさまざまな権力関係の中で構築されていること，また場所が社会集団のアイデンティティと強く結びついていることを改めて意識することであるといえる。

以上を踏まえ，本稿では汐木という小港町がどのような場所として，またどのようなプロセスで構築されてきたかを，記憶の生成に着目することで考察したい。最初に述べたように吉津側と詫間側の自治体史などの刊行物（以下，郷土誌と呼ぶ）では汐木が全く異なって語られているが，どちらがより正確か検証することが目的ではない。本稿では吉津側と詫間側のそれぞれを，集合的記憶を共有する「記憶の共同体」として位置づける。「記憶の共同体」として最も代表的であり強い規制力を発揮するのは国家であろうが，地方自治体や村落といったより下位スケールの集団や家族などの地縁的でない集団もまた，集団的なアイデンティティを想定できるという意味で「記憶の共同体」とみなせるものである[9]。そうした「記憶の共同体」の「公的な記憶」の表明されたテクスト，「正史」として書かれたテクストとして各種の郷土誌を把握する[10]。斬新な自治体史として知られる『田主丸町誌』の執筆にあたった文化人類学者の小馬は，典型的な自治体史を「制度としての自治体の物語」と評しているが[11]，吉津側と詫間側の２つの「記憶の共同体」の「物語」の中で汐木がどのように語られてきたかを検討していきたい。

以下で調査・検討の対象とする郷土誌には，表１に主なものを示したように，自治体史，町勢要覧，小学校社会科の郷土学習用副読本といったあらゆる公的刊行物のほか，郷土史家個人の著作も含めている。これらを吉津側郷土誌，詫間側郷土誌として一括するのは，これらのテクストが多少のずれを含みつつも「正史」として読まれることを前提に書かれている点で共通すると考えられ，その点に注目したいからである。吉津側，詫間側それぞれの自治体史はすべて地元の郷土史家や教員によって執筆されており，単著のある郷土史家はそれぞれの自治体史の執筆にあたった人物である[12]。後で具体的にみるように，郷土史家個人の著作と自治体史の記述はよく似ており，郷土史家の著作のみを「正史」から除外するのは適当ではないだろう。地主や実業家への批判的記述を含む［吉津③］著者の山下[13]も［吉津①］・［吉津②］の執筆者であり，［吉津③］はその発展的な記述という側面を持つ。つまり，［吉津③］もまた吉津側あるいは汐木のより正確な歴史記述，すなわち「正史」を目指す点で他のテクストと変わるところはないと考えられる。

なお，公的な記憶の全てが郷土誌として文字テクスト化されるとはいえないし，記念碑や儀式など文字テクスト以外のかたちに表象される記憶もある[14]。しかし，公的な記憶が再生産されていくサイクルの中では文字テクストの果たす役割が圧倒的に大きく，郷土誌は公的な記憶を考察する素材として適切であると考えられる[15]。

また以下では，旧吉津村と現三野町，旧詫間町と現詫間町をそれぞれ一括して「記憶の共同体」ととらえている。旧詫間町と現詫間

表1　近代の汐木に関する記述の比較

表記	位置	当時の様子	衰退の理由
吉津村誌編集委員会編『吉津村誌』，吉津村，1953。全361頁。以下［吉津①］			
汐木港，塩木港	記述なし	（第２篇人為界 第６章交通運輸）「仲買人が集るため宿屋も軒を並べ問屋も多かつた」（217頁） 1900年の埋立整備ほか，ただし史料引用のみ（219頁）「西讃に於ける重要港として船舶の出入り多く，本郡東北部10数ヶ村に使用する肥料，飼料，石灰，綿粉等はいずれも本港の陸揚げにより，又この区域内に生産する米麥の移出並びに本郡副業の王座を占める藁工品等の積出しは年と共に激増して，縣に於いても昭和11年度から３ヶ年の継続事業として，縣費補助金を支出して港内浚渫工事を施工し，船舶の出入りを容易にした…」（220頁） （第2篇人為界 第11章名勝地） 汐木荒魂神社の説明として「昔は旧三野郡一円の玄関口として栄えた商港で，近時は米穀・肥料・叺の集散地として名声を馳せた」（313頁）	（第２篇人為界 第６章交通運輸）「鉄道が敷設されてからは，的場廻轉橋を越えて汐木港へ寄港する舟が殆どなくなつた…」（217頁），「國鉄バス運行実施のため，本港の咽喉部に架せる的場廻轉橋の廻轉不可能となり，…船舶出入は遂に途絶してしまつた」（220頁）
三野町誌編集委員会編『三野町誌』，三野町，1980。全1148頁。以下［吉津②］			
汐木港	（第１編歴史 第５章近代社会）『地誌目録』からの引用で「湊は詫間，吉津の境…御番所・運上所・問屋は詫間分」（517頁）	（第１編地理 第１章三野町の沿革）「昭和初期まで三豊北部の門戸としてにぎわっていた」（21頁） （第2編歴史 第４章後期封建社会）「長年月にわたって最もよく栄えた港」，「三豊北部10数か村に使用する飼料・肥料・石炭・綿粉等が陸揚げされ，また同区域内に生産する米麦や，当時の副業の王者だった藁工品（主として肥料叺，塩叺，縄）の積み出し港として栄えた」（453頁） （第２編歴史 第５章近代社会）（本文に引用，517-518頁，復原図） （第２編歴史 第６章現代社会）商工会の説明で「農産物や肥料の集散地として経済・文化の中心であった…２つの銀行の支店が開設され…」（685-686頁）	（第２編歴史 第４章後期封建社会）「国鉄バス開通に伴い，汐木港の咽喉部に架せられていた的場回転橋の回転が不可能になり，船の出入りは完全に閉鎖されてしまった」（453頁） （第２編歴史 第５章近代社会）（本文に引用，518頁）
山下性太郎『水とくらし－汐木の歴史』，観音寺民主書店，1987。全133頁。以下［吉津③］			
汐木港，塩木港	明確ではないが，吉津と詫間にまたがることを記述	1900年の汐木港改修（87-89頁），「荷揚げされた肥料は…などで，積出すものは米・麦・塩叺・肥料叺・藁縄など…大黒丸…幸福丸・住吉丸などの物資の積み降ろしには…沖仲仕10数名が働いており…仲買人も多く集まってきた」その他，物資の移出先や銀行の存在など具体的な記述（90-92頁，商店分布復原図）	「出入港の不便は，的場に船を着けて物資の揚げ降ろしをする風潮を次第にふやし…」，鉄道開通の影響（90頁），「国鉄バスが通ることになり，的場の回転橋が固定された」（92頁）
三野町社会科副読本編集委員会編『わたしたちの三野町』，三野町教育委員会，1974。			
汐木の港	記述なし	「海が深くて大きな船もらくに横づけができた」「大きな船や小さな船がたくさん出入りして三豊郡ではたいせつな港になりました…やど屋やいろいろな店もたくさんできて，にぎやかになりました」（89頁，写真・挿絵）	「だんだん浅くなり…船はまんちょうのときだけしか出入りができなくなり…」，「鉄道がしかれ，道路もりっぱになってきました。船もしだいに大きくなり…」（90頁）
三野のくらし編集委員会編『三野のくらし』，三野町教育委員会，1996。			
汐木港	記述なし	「海が深くて大きな船も楽に横づけができた」「大きな船や小さな船がくさんん（ママ）出入りして三豊郡では大切な港になりました」（69頁，当時の写真）	「鉄道がしかれ，道路もりっぱになってきました。船もしだいに大きくなり…」（69頁）
（現地の解説プレート）三野町教育委員会・三野町文化財保護委員会・三野町文化財保護協会「旧跡讃岐汐木港」，1986。			
汐木港	記述なし	「肥料・飼料・石材等を揚げ，米麦・叺を積み出し会社，銀行，商店が軒を連ねていた…」	「「的場回転橋」固定で港の歴史は終わった」
詫間町誌編集委員会編『詫間町誌』，詫間町，1952。全402頁。以下［詫間①］			
汐木荷揚場	記述なし	（第１篇詫間町の自然地理観 第２章地勢と地質）「汐木より高谷沿岸には荷揚場，導水堤等が多くあり本町の産物は此処より移出され又移入されている」（８頁） （第11篇交通，運輸，通信 第1章陸上交通）「（的場橋は） 汐木荷揚場よりの舟の出入りを便利にするために…完成した」（260頁）	記述なし
新修詫間町誌編集委員会編『新修詫間町誌』，詫間町，1971。全1007頁。以下［詫間②］			
汐木荷場（ママ）	記述なし	（第6編新しい世の中 第7章交通）「（的場橋は） 汐木荷場から舟の出入に便利なように回転できるように造ってあった…」（399頁）	記述なし
詫間町文化財保護委員会『（詫間町の文化財8）地名のはなし（中巻）』，詫間町文化財保護委員会，1979。			
汐木荷揚場	記述なし	「汐木・塩木」の説明で「潮が満ちると本郡一の良港であったといわれ，汐木荷揚場は賑い…」（18頁） 「的場・新的場」の説明で「汐木荷揚場より上方へ積み出される米や肥料を幸福丸などの船で運んだ…」（20頁）	「的場・新的場」の説明で「戦後汐木荷揚場が使用されなくなり…」（20頁）
詫間町社会科副読本編集委員会編『わたしたちの詫間町』，詫間町教育委員会，1975。			
汐木港	記述なし	「（明治の終わり頃）このころは，汐木からたくさんのわたや米を運んでいたので，的場橋は回てん橋とよばれ，船が通れるようなしくみになっていました」（80-81頁）	記述なし

可能な限りの郷土誌を調査し，吉津側は主要なもの，詫間側は汐木について言及のある全資料を示した。また自治体史については全ページ数を示した。なお，本文中の引用も含めて漢数字はアラビア数字に改め，ふりがなは省略した。

町に連続性が強いのはいうまでもないし，旧吉津村と現三野町の場合も，汐木が近代における村内・町内の最も特筆される場所として重要視されている点で共通している。それぞれの側は，少なくとも汐木に関する限り，町村合併前と後を通じて類似した語りを繰り返しており，一連の「記憶の共同体」とみなしうることを次章以降の検討の中で示したい。

Ⅱ．近代の汐木をめぐる記憶と忘却

(1) 郷土誌の記述（図１）

汐木は西讃における一重要港で，仲買人が多く集まるため宿屋も軒を並べ問屋も多かった。今ははたご「山城屋」がそのあとを示すだけである。三豊郡北東部10数か村に使用する飼料・肥料・石灰・綿粉等は，いずれも本港で陸揚げされ，この区域内に生産する米・麦の移出並びに本郡副業の王者を占める藁工品等の積出しは，年と共に激増して，県でも昭和11年度から３か年間の継続事業として，県費補助金を支出して港内を浚渫し，船舶の出入りを容易にしたが，仁尾一善通寺間に国鉄バスが運行を始め，港の咽喉部に架けた的場廻転橋が廻転不可能になり，そのため船舶の出入りが絶えて港としての機能を失い，荒魂神社の石燈籠（燈台を兼ねた）を残すだけとなった[16]。

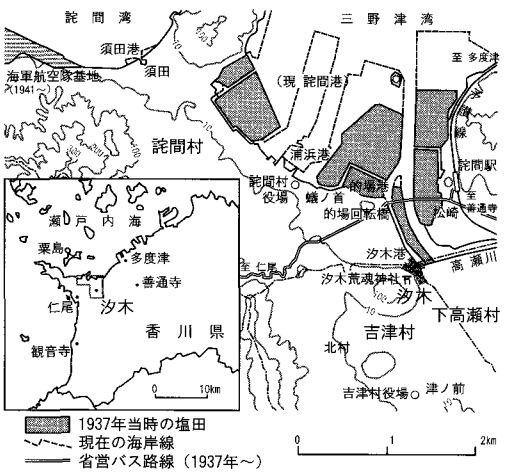

図１　汐木とその周辺

1:25,000地形図「仁尾」(1928年, 1995年)をもとに作図。1937年当時，詫間港と総称される港として，三野津湾側に汐木港のほか的場港と浦浜港，詫間湾側に須田港があった。現在の詫間港も三野津湾と詫間湾（須田港）にまたがっている。

これは吉津側の郷土誌である［吉津②］における代表的な汐木の描写である。すなわち同書では，表１に示したように，近世から昭和戦前期にかけての物資の集散地としての汐木の繁栄が繰り返し説明され，２つの銀行が汐木に支店を設けていたことが示されている。そして，このような繁栄が1937年の省営（国鉄）バス開通と的場回転橋（廻転橋）の固定化によって突然に終焉を迎えたこと，それに伴い，銀行の支店も詫間へ移転したことが記されるのである。また近世についても，丸亀藩が番所や蔵を設けた要衝であったことや，勤王家の日柳燕石と丸亀藩主の京極高朗が当地を訪れて漢詩を詠んだことが合わせて触れられる[17]。

同様の記述は，現地に設けられた解説プレートを含め，全ての吉津側郷土誌にみられるが，汐木港の終焉について異なった説明があることを指摘しておきたい。［吉津②］の汐木に関する記述は，表１からも分かるように［吉津①］における記述をほぼそのまま踏襲したものになっている。しかし［吉津①］は，汐木の衰退について，鉄道の開通という別の理由も加えて示している。また［吉津③］においてもバス開通のほかに鉄道など陸上交通の発展，出入港の不便さが，汐木港衰退の要因としてあげられている。さらに，三野町の小学校社会科副読本においては，歴史的内容の半分を汐木の記述が占め[18]，汐木が重要視されていることが分かるが，そこではバス開通の代わりに，鉄道・道路の発達と，船の大型化が汐木港衰退の理由として示されている。

こうした吉津側の汐木に関する記述の多さ

とは対照的に，表１に示したように詫間側の郷土誌における近代の汐木への言及は少ない。［詫間①］・［詫間②］の新旧の自治体史においては，汐木港は「汐木荷揚場」と表現され，具体的な港の状況や汐木から詫間への銀行の移転といった記述もみられない。また，詫間側に位置する的場回転橋がいつ，またなぜ固定化されたかを明確にしておらず，的場回転橋の固定化を汐木港終焉の要因とする吉津側とは大きく異なっている。ただし，近世の汐木に関しては，前述の日柳燕石と京極高朗の漢詩を紹介するほか[19]，「丸亀藩の年貢米の集散地汐木」と表現され，藩の番所が存在したことが「詫間の重要性」を示すものとして説明されている[20]。

こうした傾向は詫間側の他の郷土誌にもほぼ共通するとみてよい。詫間町の小学校社会科副読本をみると，古い年次版では［詫間②］と同様の汐木への言及のほか「汐木港」という表記もあったが，新しい年次版では汐木へ言及されることはなくなっている[21]。また，郷土史家の紀による『詫間町歴史散歩』[22]では藩政時代の汐木について日柳燕石と京極高朗の来訪が「汐木港」という表現とともに扱われているが，近代の汐木への言及はない。例外は，町内の地名とその地区ごとの略史を解説した『地名のはなし』[23]であり，この冊子では近代の汐木が物資の集散によって繁栄したことに言及されている。

(2) 大きく相違する記憶（図２）

このように吉津側と詫間側の郷土誌における汐木の記述は大きく異なる。そこにみられる記述の偏りを「選択と排除，誇張と矮小化，抑圧と隠蔽などの解釈学的契機」[24]として検討を加えつつ，双方で相違する点をより明確にすることにしよう。

汐木の位置する三野津湾は，かつては深く湾入し，現在の三野町吉津津ノ前や北村が中世以前の主要な港であったと考えられている[25]。三野津湾は中世から干拓が進められ，1747（延享４）年に汐木より内側が締め切られた後に，汐木は本格的に港として利用されるようになったとみられる。丸亀藩は番所や蔵を汐木に置いたほか，幕末には専売品である砂糖の交易を管理する砂糖会所を汐木に設けるなど，汐木は丸亀藩にとって重要な拠点であった。明治に入ってからもこうした状況に大きな変化はなかったようであり，周辺の村々を管轄する邏卒出張所も一時設けられた。1900年には港の一部が埋め立てられ，荷揚場や倉庫が整備されている。

ここまででも触れたように，汐木集落は吉津と詫間にまたがり[26]，藩政時代の番所や蔵，明治以後の荷揚場などの主要港湾施設は

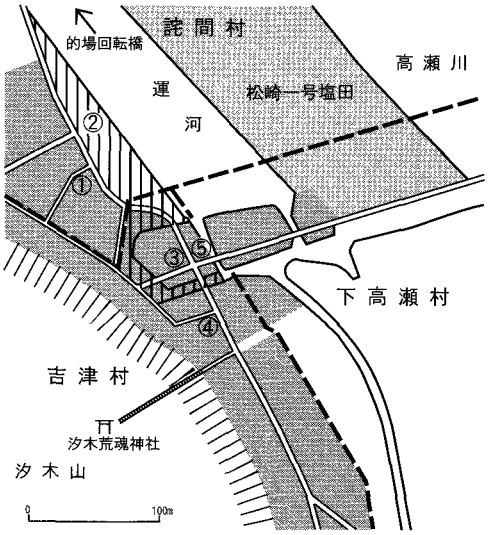

図２　大正末頃の汐木集落

家屋の連担する範囲

1900年に埋立てられた範囲

①丸亀藩の番所・蔵のあった位置
②荷揚場（1900年～）
③多度津銀行支店
④琴平銀行支店
⑤現在，記念碑・解説プレートのある位置
資料：山下性太郎『水とくらし―汐木の歴史』，観音寺民主書店，1987，91頁
および聞き取り・現地調査により作成。

詫間村内に位置していた。ところが，吉津側の郷土誌においては［吉津②］で史料の引用という形で触れられているのを除き，このような余りに基本的な事実が全く示されていない。先にみたとおり，三野町の小学校社会科副読本では歴史的記述の半分を汐木港に関する記述が占め，当時の港の写真も載せられているのだが，その写真は実は町外を撮影したものであって，しかもそれについて何の断りもないということには違和感を覚えざるを得ない。一方の詫間側は，丸亀藩の番所の存在を「詫間の重要性」を示すものとして，また日柳燕石の漢詩「汐木路上」を「的場橋から汐木港まで」，すなわち詫間側の情景を詠んだものとして提示している[27]。吉津側が汐木をあたかも全て吉津側に位置するかのように語り，港そのものは詫間側に位置したことを隠蔽するのに対し，詫間側も，近世に限定した上で，汐木を自らの側に属する場所として語っているといえるのである。

明治から昭和初期にかけての汐木には，琴平銀行と多度津銀行の支店[28]，米穀や肥料，叺などを扱う問屋がいくつか立地していた。吉津側郷土誌は当時の汐木の繁栄について記述しているが，そうした繁栄の語りはいくらか差し引いて読まなければならないようである。なぜなら，汐木の当時の状況を具体的に教えてくれる資料は吉津側郷土誌を除けば皆無に近い[29]。そのような中で，汐木の繁栄を高らかに伝える次の新聞記事（『香川新報』1927年10月11日）は，一見，注目に値するように思える。

> 西讃詫間灣の奥深く入りし高瀬川の清流注ぐ河口に古來より著名の一良港あり汐木港と云ふ。吉津村にありて往時は舊三野郡一圓の玄関口として殷賑なる商港であつたが海陸の設備に遠ざかりしか一時衰退せしも近時は米穀，飼料及び叺等の集散港として讃岐汐木港の名聲は阪神方面に高く觀音寺港を凌駕せんす勢いを示して居る。

ただし，後述するようにこの新聞記事は一種のキャンペーン記事である。実際の汐木港は観音寺港に遠く及ばなかったとみられ[30]，汐木の繁栄はごく限定されたものであったと判断される。

吉津側の汐木をめぐる語りを最もよく特徴づけているのが，汐木港の衰退，終焉の説明である。吉津側郷土誌のうち［吉津②］と現地の解説プレートという目につきやすいテクストにおいては，港の終焉の原因を的場回転橋の固定のみに求め，小型船しか入港できなかったことや鉄道の開通を示していない。河口港である汐木港は水深も浅く，さらに1903年には港の前面に塩田が築造されたために幅30メートルほどの運河によって三野津湾とつながった状態であった。さらに日露戦争直前の1905年には，善通寺の陸軍第11師団により善通寺と乗船地の１つである須田港を結ぶ道路が建設・整備され，その運河に橋が架けられた[31]。また，1913年には現予讃線の多度津・観音寺間が開業している。沖仲仕に依存することは近隣諸港も同じであるにせよ，運河に架けられた橋を料金を払って通過する必要のある汐木港が不利であったことは明らかであろう。省営バス路線開通に伴う的場回転橋の固定化には目立った反対もなかったらしいこと[32]もそれを裏づけると考えられる。吉津側の郷土誌では，港が機能的に劣っていたことは積極的に語られない一方で，汐木の繁栄が省営バス開通という外部の抗しがたい力で突如，悲劇的にもたらされたということが，誇張して描き出されているのである。

一方，詫間側は汐木をほとんど記述していないが，それこそがまず注目しなければならない点といえる。子細にみれば，「汐木港」ではなく詫間港の一部としての「汐木荷揚場」という呼称を主に用いていることが指摘でき，汐木独自の価値が矮小化され，無視されているといえる。また，近代の記述がほとんど皆無である一方で，近世についての記述

図3　汐木港の現状
荷揚場跡地を運河の対岸からみる。1998年撮影。

がある程度は存在することも，汐木の価値の矮小化として解釈できよう。

現在，汐木集落は塩田跡地のゴルフ場や住宅地によって三野津湾から隔てられ，かつて荷揚場や倉庫があった付近には新しい住宅が立ち並び，港町であった当時を偲ばせるものはほとんどない（図3）。集落の吉津側には「旧跡讃岐汐木港」と刻まれた記念碑と汐木の歴史を記した解説プレートが建てられ[33]，目に見える形で汐木港が記念されている。それに対して，港湾施設のあった詫間側にはそうしたものは見当たらない。郷土誌から読み取れた吉津側と詫間側の差異は現地にも現れているといえるのである。

以上検討してきたように，吉津側と詫間側という2つの「記憶の共同体」は，誇張，矮小化，隠蔽といった語りのレトリックを伴って汐木を描き出し，汐木の近代をどのように記憶するかという点で大きな相違をみせている。次章ではこうした記憶の相違がどのような背景を持っているか，どのように産出されているかを検討することにしたい。

Ⅲ．来歴を誇る「物語」と汐木

(1)「物語」の創出

吉津側と詫間側の自治体史である［吉津②］と［詫間②］において，汐木や旧詫間村内の諸港がどれだけ記述されているかを時代別にまとめたのが表2である。前章では詫間側が近代の汐木をほとんど記述していないことを確認したが，それ以外の旧詫間村内の諸港に関する記述も多くないことがわかる[34]。だが具体的な記述以上に注目できるのはいくつかのテクストに表れた詫間港の連綿と続く繁栄の語りであり，［詫間②］の「詫間の港」と題された今後の港勢を展望する節には次のような文章がみえる。

（詫間港は）高谷半島で三野津と須田に分けられていて，宗良親王の詫間ご配流，西行法師の上陸，丸亀藩の年貢米の集散地汐木はすでに述べたように三野津湾にあり，日露・上海・日華の戦役に出征基地となり，海軍航空隊が置かれたのは須田側である。

この歴史的実績のある港も，時代の進展にともない，船舶が大型化したため，従来の狭小な港湾設備では時代の要求に応じられなくなった[35]。

具体的な近代期の記述を欠きつつ，中世から現代へと続く詫間港の発展が語られていることがわかる。また町勢要覧にも戦後の詫間港の発展を北前船以来の海上交通の発達と結びつけた記述がある[36]。そして詫間町が発行した各種の詫間港関係のパンフレット[37]には「詫間港の概要」として次のような興味深い説明がある。

詫間港は香川県三豊郡の東北に位置し，天然の良港のため古くより北三豊における海

表2　集落別の記述量の比較

郷土誌	集落	中世	近世	明治―戦前	戦後
［吉津②］	汐木	2	10.5（5） ＋復原図	10.5	0.5
［詫間②］	汐木	0	1（0.5）	1	0
	詫間	0	0.5（0.5）	2.5	46.5 ＋計画図ほか
	須田	1	2（2）	15.5＊ ＋古写真×2	2

単位：行
時代を特定できない記述は除いた。（　）は史料の引用部で内数。
＊うち11.5(行)が軍事関連の記述。

の玄関口として農産物をはじめ，諸物資の集散移出で賑わい日清，日露を初め過去において戦争時には軍港として，又，大東亜戦争中には海軍航空隊の所在地として栄えてきた。

「海の玄関口」，「諸物資の集散移出」はほとんどの港に当てはまる説明であり，後段の「軍港」，「海軍航空隊の所在地」は須田港が該当する。「詫間港」とあいまいに示すばかりで，近世から近代における旧詫間村内の諸港，つまり須田港，浦浜港，的場港，そして汐木港が混同して語られていることが指摘できる。

このように具体的な記述が少ないのは，当時の詫間村内の港には塩田や軍事関係を除けば特記するほどのことがなかったからともいえよう[38]。しかし，具体的な記述を欠く一方で，現在の詫間港の繁栄が中世，近世，近代，そして現代へと連綿と続くものとして語られていることが注目できるのである。

詫間港は第二次世界大戦後に大規模に整備され，1970年には香川県下で3番目に開港場の指定を受けた。それに伴う「私たちは，美しい自然と天然の良港に恵まれた詫間の町民であることに，誇りと喜びをもっています」と冒頭に述べる「詫間町民憲章」の制定（1970年）や，詫間港を会場とする「たくま港まつり」の開始（1972年）などからもうかがえるように，現在の詫間町にあっては港が最大のアイデンティティの核といってよい[39]。こうしたコンテクストの中で，現在の詫間港の繁栄を過去から現在まで連綿と続くものとする語りは定着していると考えられる。そのような語りのもとでは，詫間港の一荷揚場としてのごく限られた役割しか汐木港には与えられていないことも当然といえるかも知れない。

このような詫間側に対し吉津側は全く異なる。純農村であった旧吉津村にとって汐木が重要であるのはもちろん，現三野町全体にとっても，役場所在地である旧下高瀬村中心部は鉄道の開通によって商業中心地としての地位を隣の上高瀬村（現高瀬町）に取って代わられたように，汐木は町の来歴を語る上で特筆される場所なのである[40]。さらに，吉津側は古代以来の郡名のついた津で現在の三野町吉津津ノ前に比定される三野津の末裔として汐木港をとらえており，［吉津②］には汐木港と三野津を完全に混同した記述や，未だ汐木港が存在していない中世期の製塩さえ汐木に結びつけた記述がある[41]。吉津側にとって汐木は自らの来歴を語る際に軸となる場所といえるのである。

また，吉津側は1927年に青年団を中心とした運動によって汐木（塩木）荒魂神社を「讃岐十景」に当選させている[42]。先に示した汐木の繁栄を伝える新聞記事は「讃岐十景候補地巡り」として執筆，掲載されたものであり，意図的，戦略的に外部からの評価を得ようとした運動であったことは注目すべきといえよう。現在ではこの当選について言及されることはほとんどないが，［吉津①］には大きく取りあげられており，かつて吉津側は「讃岐十景」を誇るべき評価として汐木に結びつけていたのである。

このように，吉津側と詫間側の自らの表象を近代に留まらず長いスパンで検討すると，それぞれの側が自らを過去に重要な役割を果たしていた地域，連綿と発展してきた地域として語っていることをまず指摘できる。Ⅰ章でも述べたように，このように言語化され整序された記憶は「物語」と呼ぶことができる。言語哲学者の野家は「出来事，コンテクスト，時間系列」という要件を備えた言語行為を「物語行為」と呼んだ[43]。「物語」に編成されることよって個々の出来事は「意味の体系性を与えられ」，あるいは「無視され，排除される」といってよい[44]。吉津側において［吉津①］で汐木港終焉の理由として鉄道の開通が示されていたのが［吉津②］では語

られなくなり，繁栄のみが強調されるようになるのは，直接の記憶が薄れ「物語」が整備されたものといえるかもしれない。

だが，郷土誌というジャンルがいわば郷土自慢の「物語」になることは驚くことではない。ここでより強調したいのは，そうした吉津側，詫間側それぞれが自らの来歴を誇る「物語」の中では，汐木に与えられた役回りが全く異なっているということである。吉津側においては汐木が「物語」の中心にふさわしい場所として選び出され，語られるべきさまざまな出来事は汐木に関連するものとして体系づけられていた。それに対して詫間側の「物語」は現在の詫間港を軸に描き出されており，その中に汐木はほとんど位置を与えられずに排除されていた。すなわち，汐木にどのような役回りが与えられるかは，吉津側と詫間側が自らの来歴の「物語」をどのように叙述するかという戦略に左右されているのである。

いいかえれば，吉津側と詫間側の「物語」叙述戦略の違いによって，汐木という同一の場所について全く相反する語りが生産されているのである。吉津側と詫間側の「物語」同士が汐木をめぐって対立しているといえるだろう[45]。前章で明らかにした近代の汐木をめぐる記憶の大きな相違は，こうした汐木をめぐる「物語」間の対立の一部として把握されるのである。

(2) 著名な出来事をめぐる語り

汐木をめぐって吉津側と詫間側がどのような「物語」の叙述戦略を展開しているか，もう少し細かくみていこう。以下で検討する近世の北前船と中世の製塩という２つの出来事はいずれも汐木に関わり，吉津側と詫間側の「物語」の間でそれらをめぐる対立が確認できる。

まず近世の北前船についてみると，前節でも触れたように詫間は近世に栄えた港としてしばしば言及される。［詫間②］では具体的に詫間在住の船主名をあげて北前船の存在が示されているし[46]，前述したように町勢要覧でも北前船に言及されている。一方で，吉津側においても汐木港が近世以来栄えたことが語られ，現地の解説プレートには北前船の寄港が説明されている。詫間側が（明示してはいないが）現詫間港の位置する詫間中心部を，吉津側が汐木を，北前船が出入りした歴史的意義のある港町として語っていることが分かるのだが，それだけではない。［吉津③］においては汐木の北前船の船主名を示すとともに，［詫間②］に述べられた詫間の北前船の母港は実は汐木であると述べることで，詫間側へのより明瞭な反論が行われているのである[47]。この反論は決して首肯できるものではない[48]。しかし，双方が北前船という出来事を重要視することによって，出来事そのものが争奪されていることに注目したい。

もう１つの中世の製塩についても同様である。詫間は丸亀藩によって入浜式塩田が建設されて以来，製塩によって発展した地であり，北前船も製塩業と結びつけられて語られている。その先駆けというべき中世の製塩についての記述を［詫間②］にみると，1445（文安２）年の『兵庫北関入船納帳』に「タクマ塩」が積み荷として現れていることがその当時の詫間で製塩が盛んであった根拠とされている[49]。そしてもう一方の吉津側においても，三野津湾の奥に位置する吉津などで早くから製塩が行われていたことが述べられる[50]。それとともに，［吉津②］では中世史の部分に「汐木からは，多量の塩を…兵庫や堺方面に出した」[51]という表現で『兵庫北関入船納帳』との関連を示唆していると思われる記述があり，［吉津③］ではより明確に「タクマ塩」はむしろ吉津産だとする解釈が示されている[52]。北前船と同様，中世の製塩も争奪の対象になっているのである。

このように，吉津側と詫間側の「物語」叙

述にあたって，近世の北前船と中世の製塩という2つの出来事が争奪の対象となり，明瞭に対立の争点となっている。そしてさらに注目したいのはその対立の仕方である。

北前船が全国的に知られた著名な出来事であることはいうまでもないし，中世の製塩も双方の主張の根拠になっているのは『兵庫北関入船納帳』という権威ある史料における「タクマ塩」の記載である。つまり北前船も中世の製塩も，一郷土史の域を越え，日本史上の価値の付与された出来事であるといえる。吉津側と詫間側は，何らかの出来事の具体的な様相をめぐって対立しているのではなく，高い評価がすでに確立した出来事がどちらに帰属するかをめぐって，いいかえればどちらが自らの「物語」に取り込むかをめぐって対立しているといえる。前章で検討した近代汐木をめぐる記憶の相違も，物資の集散による繁栄という出来事の争奪として解釈することが可能であるし，近世の汐木について丸亀藩の番所や尊王家として香川県内では知られた人物である日柳燕石の漢詩を吉津側と詫間側の双方が自らのものとして語ることも同様といえよう。

これらの出来事をめぐる語りには来歴を誇る「物語」叙述の戦略性がはっきり表れている。著名な出来事を取り込むという戦略によって，それぞれの側の来歴の「物語」は，誇りうる内容を豊かに含んだ分かりやすい「物語」に容易に再編されていると考えられる。「物語」叙述にとって重要な戦略であるといえるだろう。

そして，吉津側と詫間側が著名な出来事を競って自らの「物語」に取り込んでいることは，一般化するなら，例えば詫間側が「塩の町」と称して全国的な地位を誇り，吉津側が汐木港の前身たる三野津の由緒として西行法師の来訪を語るのと同様に，外部からの評価をいかに獲得・利用するかという戦略の表れに他ならない。阿部は横浜の近代史について「横浜を語るということは，ほとんどつねにといっていいくらいに〈日本の〉という位置でおこなわれる」と論じているが[53]，これは国家的に枢要な横浜という都市のみならず，吉津側，詫間側についても，さらにはあらゆる「記憶の共同体」にあてはまろう。日本史，あるいはそれに準ずる県史が個々の出来事の価値を判断する公準となり，その公準を満たした出来事に語る意義が認められていると考えられる[54]。吉津側と詫間側の「物語」を，そうした公準の枠内でより高い承認を求め互いに対抗する「物語」としてとらえるのは少々飛躍であろうか。しかし，場所が「物語」叙述の中で構築されるばかりでなく，その「物語」もまた日本史，県史という上位スケールの「記憶の共同体」の「物語」の中でプロットが形作られるという構図をここに確認することは可能であろう。

Ⅳ．おわりに

本稿では，まず郷土誌の記述の分析から，近代の汐木の繁栄を強調する吉津側に対し，詫間側はそれをほとんど忘却しており，双方の記憶には大きな隔たりがあることを示した。次に，汐木を軸に自らの来歴を誇る吉津側の「物語」と，現詫間港を軸に展開される詫間側の「物語」は，汐木という同一の場所をどう位置づけるかをめぐって対立していることを明らかにした。さらに，近世の北前船，中世の製塩という汐木に関わる2つの出来事の語りを検討することで，「物語」の叙述戦略の特徴として，著名な出来事が競って取り込まれていることなどを指摘した。汐木はこうした戦略的な「物語」叙述によって構築されている場所であり，吉津側と詫間側という2つの「記憶の共同体」の間にある「物語」の対立を垣間みせる特別な場所なのである。

さて，汐木や詫間港は，吉津側と詫間側「記憶の共同体」の「物語」において種々の

出来事が帰属する「記憶の場」である。ここまで検討してきた「記憶の場」には他に，郷土史に関する出版物，祭り，記念碑などがあるが，汐木や詫間港は地理学的な空間スケールの「記憶の場」であるといえよう。最後にこうした地理学的空間スケールの「記憶の場」について2点ほど指摘しておきたい。

これらの「記憶の場」が吉津側と詫間側の「記憶の共同体」にとってそれぞれ重大な意義を有していることは，これら2つの場所がそれぞれの「物語」叙述の軸となっていることからも明らかであるが，そればかりではない。吉津側は汐木に中世の三野津を結びつけて語る一方，詫間側は戦後の詫間港に旧詫間村内の諸港の隆盛をつなげて語っている。想像上の連続が仮構されることによって「記憶の場」が構築されていることにまず注目しておきたい。また，汐木には「旧跡讃岐汐木港」と記された記念碑が建てられた一方で，詫間港でもたくま港まつりが行われ，港の繁栄を記念する小公園が作られている。空間スケールの縮小と可視化によって，「記憶の場」の強化・純化が図られていることが指摘できよう。場所はまさにこのようなコメモレイション（記念・顕彰行為）commemorationの一環として構築されているのである。

（東海女子大学文学部）

［付記］

調査に際して三野町汐木在住の三木孝夫先生から有益なご教示をいただきました。また執筆にあたっては京都大学人間・環境学研究科の金坂清則先生をはじめとする先生方にご指導をいただきました。記して感謝申し上げます。

［注］

1) 藩政期の吉津村がそのまま明治行政村に移行，1955年に下高瀬村と大見村の2ヵ村と合併して三野村となり，1961年に町制を施行した。詫間村は1890年に松崎村を合併，1942年に町制を施行，さらに1955年に粟島村と荘内村の2ヵ村と合併した。なお，より正確にいえば汐木集落の一部は旧下高瀬村（現三野町）にもまたがっている。1955年の合併時，吉津村は詫間町との再合併を条件とし，詫間町もそれを求めたものの，結局再合併は実行されなかった。
2) 拙稿「場所をめぐる構築主義的アプローチの可能性」，東海女子大学紀要23，2004，73-83頁。
3) 例えば次のような研究がある。MacCabe, S., "Contesting home: tourism, memory, and identity in Sackville, New Brunswick", ***Canadian Geographer***, 42, 1998, pp.231-245. 神田孝治「南紀白浜温泉の形成過程と他所イメージの関係性―近代期における観光空間の生産についての省察」，人文地理53，2001，430-451頁。
4) 例えば次のような研究がある。Jacobs, J.M., "Cultures of the past and urban transformation: the Spitalfields Market redevelopment in East London", in Anderson, K. and Gale, F. eds., ***Inventing places: the study of cultural geography,*** Longman Cheshire, 1992, pp.194-211. Peet, R., "A sign taken for history: Daniel Shays' memorial in Petersham, Massachusetts", ***Annals of the Association of American Geographers***, 86, 1996, pp.21-43.
5) 小関　隆「コメモレイションの文化史のために」（阿部安成・小関隆・見市雅俊・光永雅明・森村敏己編『記憶のかたち―コメモレイションの文化史』，柏書房，1999），7頁。
6) ノラ，P.著，長井伸仁訳「序論 記憶と歴史のはざまに」（ノラ，P.編，谷川稔監訳『記憶の場―フランス国民意識の文化＝社会史 第1巻 対立』，岩波書店，2002），29-56頁（原著1984）。
7) 地理学者以外では，例えば消滅した場所に焦点を当てたリードや慰霊・顕彰のための場所を論じたボドナーの研究がある。Read, P., "Remembering dead places", ***The Public Historian***, 18-2, 1996, pp.25-40. ボドナー，J.著，野村達朗・藤本博・木村英憲・和田光弘・久田由佳子訳『鎮魂と祝祭のアメリ

カ―歴史の記憶と愛国主義』，青木書店，1997（原著1992）。

8) 例えば次のような研究がある。フット，K. E.著，和田光弘・森脇由美子・久田由佳子・小澤卓也・内田綾子・森丈夫訳『記念碑の語るアメリカ』，名古屋大学出版会，2002（原著1997）。Azaryahu, M., "Replacing memory: the reorientation of Buchenwald", *Cultural Geography*, 10, 2003, pp.1-20.

9) 「記憶の共同体」という着想や定義は小関による。前掲5）。

10) ある「記憶の共同体」における支配的な集団的記憶を「公的な記憶public memory」，それが文書化され権威的なスタイルで表現されたものを「正史official history」と位置づけることができる。前掲5）7-9頁。そのような立場からの自治体史についての論考として例えば次のものがある。藤井美穂「市史編纂と自分史―北海道士別市『士別市史抄 私たちの歩み』より」，人文論究50-4，2001，67-79頁。

11) 小馬徹「「記憶／歴史」を書く―『田主丸町誌』の冒険と挑戦」（神奈川大学評論編集委員会編『ポストコロニアルと非西欧世界』，御茶の水書房，2002），88頁。

12) 単著を持つ地元郷土史家については後述。［吉津①］には福家惣衛（県文化財保護審議会委員，元師範学校教員）が専門家として加わっているが，氏の執筆部分は村史概説のみであり，他の部分の編集に関わっていない。

13) 教員・旧吉津村議を勤め，［吉津①］・［吉津②］の編纂にも加わっている人物。革新系政党活動家でもあり，氏のライフヒストリーともいうべきこの著作には自治体史と対立しかねない部分もある。しかしそれにも関わらず，近代の汐木の繁栄の様子やその評価については，表1にも示したように，自治体史などとの齟齬はみられない。

14) 前掲5）。またバークは集合的記憶が伝承されていく際の5つのメディアとして，口承，文書，イメージ（想像的イメージ，有形的イメージ），行為，空間をあげている。Burke, P., *Varieties of cultural history*, Polity Press, 1997, pp. 41-59.

15) 本稿では文書テクスト化された記憶として言説をとらえている。このように言説を把握することで，公的な記憶とそこに回収されない多様な記憶の差異や，文書テクスト以外の記憶の表現，記憶の忘却など，より構造化して言説を理解することができると考えられる。

16) ［吉津②］517-518頁。

17) ［吉津②］453・517-518頁など。「汐木浜の風景」と題した江戸時代の汐木の繁栄を伝える一文は吉津村庄屋であった汐木の三木家が所蔵する『地誌目録』の一節を現代語訳したものである。なおこの『地誌目録』は，丸亀藩が地誌書『西讃府志』を編纂するにあたって吉津村に1842（天保13）年に提出させた文書の写しとみられる。

18) 歴史的な内容として汐木港と国鉄高瀬大坊駅（現みの駅）設置の2点のみが一貫して扱われ，1974年版では8頁中4頁，1987年版と1996年版では4頁中2頁が汐木港に関する内容である。三野町社会科副読本編集委員会編『わたしたちの三野町』，三野町教育委員会，1974。同『わたしたちの三野町』，三野町教育委員会，1987。三野のくらし編集委員会編『三野のくらし』，三野町教育委員会，1996。

19) ［詫間②］332-334頁など。［詫間①］では日柳燕石にのみ言及。

20) ［詫間②］236・826頁。

21) 詫間町社会科副読本編集委員会編『わたしたちの詫間町』，詫間町教育委員会，1975，80-81頁。同『わたしたちのまち詫間（第7版）』，詫間町教育委員会，1992。

22) 紀　豊『詫間町歴史散歩』，詫間町文化財保護委員会，1979，20-21・58-60頁。同町の有線放送で放送された内容で，著者は［詫間②］の編集主任を勤めた詫間町粟島在住の元教員。

23) 詫間町文化財保護委員会『（詫間町の文化財8）地名のはなし（中巻）』，詫間町文化財保護委員会，1979，18・20頁。

24) 野家啓一「『忘却の海』の深さ」（中村雄二郎・野家啓一『（21世紀へのキーワード―イ

ンターネット哲学アゴラ）歴史』，岩波書店，2000）40頁。

25）［吉津③］を参照。ただし北村に港があったことを説明する同書８頁の「讃岐の古地図」と題された図には「丸亀図書館蔵書写」とただし書きがあるが，丸亀市立史料館（図書館と分離）所蔵のどの図にもみられない書き込みがあり，実際には山下による推定復原図と考えられる。

26）汐木集落ではかつては詫間側からも吉津側へ越境入学する一方，電話は吉津村の他の地区とは異なり詫間側からひかれた。

27）前掲22）21頁。

28）琴平銀行支店は1925年に金融不況下で休業，閉店。また吉津側の高松百十四銀行（多度津銀行を買収）支店が詫間へ移転したという記述には汐木の繁栄が詫間に奪われたという思いがうかがえるが，同支店は詫間支店所属の出張所に格下げ後，廃止されたもので，吉津側郷土誌の記述は正確ではない。

29）当時の郡史や県史に汐木に関する記述はない。戦前香川県の最も詳細で代表的な地誌である次の文献でも，「都市の萌芽」（210頁），「地方にある村落の中で都市化されたもの」（213頁）として多くの集落が列挙されているがその中に汐木は入っていない。①香川県師範学校・香川県女子師範学校編『香川県綜合郷土研究』，名著出版，1978（初版1939）。近隣の自治体史では，三野町の南に隣接する高瀬町の自治体史で汐木の運送屋の存在（1941年）に触れられているのが汐木についての唯一の記述である。②高瀬町誌編集委員会編『高瀬町誌』，高瀬町，1975，142頁。なお，新聞記事は『香川新報』を1926～1937年のうちおよそ半分を閲覧した。

30）汐木港は詫間港の一部であるため汐木港のみの統計は得られないが，汐木港を含む詫間港と上述の新聞記事中で言及されている観音寺港を両港の統計が得られる1930年において比較すると，詫間港の入港貨客船数は観音寺港のわずか33分の１，同様に輸（移）出入貨物価額は10分の１に過ぎない。汐木港に限定するならその差はさらに拡大しよう。内務省土木局編『大日本帝國港灣統計　昭和５年』，雄松堂出版，1994（初版1931）。

31）当初は開閉式の橋であったのが1919年に回転式の橋に架け替えられた。

32）善通寺駅から詫間駅，仁尾を経由して観音寺駅までを結ぶ路線で1937年８月１日に開通。吉津村は路線の変更を陳情しているものの，これは的場回転橋と汐木港への支障を理由とするのではなく，自村中心部を経由することを求めたもののようである。『大阪朝日新聞』（香川版）1935年11月７日，『香川新報』1935年11月８日。なお省営バス開通以前から的場回転橋を通過する民営バス路線は存在していた。

33）記念碑は町文化財保護協会と汐木自治会協議会によって，また解説プレートは町教育委員会と町文化財保護委員会，町文化財保護協会によって1986年に建てられている。

34）［詫間①］では須田港の漁業組合による修築と軍事面の利用が記述の中心である。6-8・271頁。

35）［詫間②］826-827頁。

36）詫間町『香川県詫間町町勢要覧1995』，詫間町，1995，29頁。

37）以下のパンフレットに全く同じ文章がある。詫間町『詫間港開港記念』，詫間町，1970。同『詫間港開港20周年記念』，詫間町，1990。なお日清戦争時に「軍港」であったというのは誤り。

38）昭和初期の詫間村中心部（現詫間港付近）については，港の衰退などによって「今や西の方須田に阻まれ東の方松崎に遮られ昔日繁盛の夢を見ること迚も覚束ない」などと断じた新聞記事もある。『香川新報』1928年５月８日。

39）詫間を指して「リトル神戸」という比喩すら登場している。詫間町商工会『詫間町商工会の歩み』，詫間町商工会，1980，13頁。

40）旧下高瀬村の衰微については次を参照。前掲29）①191頁。小学校社会科副読本において歴史的内容の半分を汐木が占める（前掲18））ほか，［吉津②］における明治～昭和

戦前期の記述量を比較すると，汐木と下高瀬中心部はともに10.5行である。

41) ［吉津②］685・371頁。

42) 1927年９月１日から11月30日の期間，『香川新報』１部につき５票ずつ刷り込まれた投票用紙または葉書による投票で香川県内の景勝地から得票順に上位十景を選定し，様々な宣伝を行うというもの。汐木荒魂神社は過熱した運動に勝ち残り，４位で入選している。

43) 野家啓一『物語の哲学―柳田國男と歴史の発見』，岩波書店，1996，18頁。

44) 千田有紀「構築主義の系譜学」（上野千鶴子編『構築主義とは何か』，勁草書房，2001），28頁。

45) 吉津側と詫間側の「物語」が相手を攻撃したり否定したりするような部分を含んでいるわけではないが，汐木についての語りに限定すれば双方は対立しているといえよう。なお，Ⅲ－(2)の最後で述べるように，「物語」は互いに対抗する面をもつと思われる。

46) ［詫間②］267頁。

47) ［吉津③］83-84頁。

48) 客船帳の「詫間」が汐木を指している可能性はあるが，［吉津③］が指摘する古屋（旧屋）は詫間村蟻ノ首に居住し詫間の塩田開発に中心的役割を果たした旧家であり，その持船の母港が汐木であったとするのは無理があろう。なお，広島県忠海の船問屋江戸屋の客船帳には讃岐国の「し保ぎ」の船９艘の記載がみえるほか，２艘の記載がある「下高城」を『香川県史』に従って「下高瀬」と解すればこれも汐木港に関係する可能性がある。香川県編『香川県史４近世Ⅱ』，香川県，1989，493-496頁。江戸屋の客船帳については竹原市立竹原書院図書館所蔵の複写本を閲覧した。なお，幕末の地誌書『西讃府志』によれば，詫間村に積石数で100石に満たない小船が9艘あるのみで，松崎村・吉津村・下高瀬村には帆船は所在しない。堀田樟左右編『西讃府志』，那珂多度同志会，1898（初版1858）。

49) ［詫間②］345頁。

50) ［吉津②］323頁など。ただし［詫間②］でも吉津の方が製塩は早かったことを述べている。200頁。

51) ［吉津②］371頁。

52) 吉津は中世には詫間郷の一部であったことがその主張の根拠となっている。［吉津③］11頁。

53) 阿部安成「横浜歴史という履歴の書法―〈記念すること〉の歴史意識」（阿部安成・小関隆・見市雅俊・光永雅明・森村敏己編『記憶のかたち―コメモレイションの文化史』，柏書房，1999），73頁。

54) これら外部からの評価とは，西川が論じるところのわれわれを国家へと回収するさまざまな「回路」にほかならず，ある「記憶の共同体」の価値は日本史・日本地誌との間の回路をどれだけ確保できるかにかかっているといえよう。西川長夫『国民国家論の射程―あるいは〈国民〉という怪物について』，柏書房，1998，269-276頁。

Conflicting memories and place: historical consciousness of Shiogi, a small port in Kagawa Prefecture

OHIRA Teruhisa

This article examines how place comes to be constructed in conflicting memories through the case of a small port Shiogi in Kagawa Prefecture. Although Shiogi was a rather prosperous port in the coast of Seto Inland Sea of Japan since Edo period, it had declined completely before World War II like the other ports at the mouth of a river. While Shiogi is situated in the boundary of two districts named Yoshizu and Takuma, there is a great divergence in the descriptions of Shiogi between publications in Yoshizu and those in Takuma. That is, details in the prosperity of Shiogi are recorded in Yoshizu, but they are hardly described in Takuma. Regarding the description of both sides' publications as the expression of "public memory," it can be said that the memory of both districts conflict over Shiogi. Furthermore, both sides are narrating themselves respectively as the area played an important role in the past and progressed continuously. Shiogi is given a different role to the "narrative" of each side boasting of its past. It appears that various historical events related to Shiogi are given significance by being woven into such a "narrative." It can be pointed that Yoshizu and Takuma competed with each other for two prominent events related to Shiogi, namely "kitamae-bune" in Edo period and medieval salt manufacturing. Shiogi is the place constructed in such a strategic "narrative" description, becoming a focus of the conflict between Yoshizu and Takuma.

Key words: Place, Memory, Narrative, Port, Kagawa Prefecture